

本紙を作成している社団法人倫理研究所は、九月が年度初めとなります。

創立は昭和二十年九月三日。創始者丸山敏雄は同日、『夫婦道』起稿。この世界文化建設の大任に入る」と自身の日記に記し、倫理運動を起こしました。

昭和二十年九月といえば、終戦後間もない時期です。日本の劣勢が明白になるにつれ、次代を担うべき若者たちが多く戦地へ赴いたのは歴史の刻むところです。

一度戦地へ赴くと、二度と祖国の土を踏むことが出来ない者は数多くいました。その中の一人、ある二十三歳の海軍少尉は、派手を好むのもよい。然し地味に東亜の捨石となる覚悟なくして誰が縁の下の力持にならうか。冷静に考えて自己の最善を地味に尽くすことが最も大切なのではあるまいかと信ずる（『命のことば』抜粋）と記した後、昭和二十年四月二十九日に神風特攻隊として旅立ちました。しかし中には、自身の意とは裏腹に任地に赴いた人たちもあるでしょう。そうした多くの尊い命を支えられ、今の日本の繁栄があるのです。

現在の事件・事故などの諸問題を鑑みる時、その繁栄のありがたさを忘れ、迷いの道を私たちは歩んでいるのかもしれない。ただ他人を否定・非難し、政治等を批判したところで、なんら変化の兆しは望めません。私たちにまず出来ることは「自分を変えること」です。その時に家庭も会社も、本当の繁栄へと歩を進めることが出来るのです。

ある地方に、従業員数二十五名前後で土木関係の仕事を営む 氏の会社があります。



先人の願いを糧に 自分と向き合う

え・牧えみこ

同社が『職場の教養』を取り入れた朝礼を導入し、本格的な社風改革に乗り出した矢先のこと。取引先二社が倒産し、約六〇〇〇万円の不渡りを受け、どうにも立ち行かない状況に陥りました。もうどうにでもなれ」と半ば自暴自棄になり、前後の事情を社員たちに打ち明けたのです。

帰ってきた言葉は「あなたを信じてついてきた俺たちを、いったいどうしてくれるんだ。俺はあなたが好きだからついてきた。給料が下がってもいい。時にはなくてもいいから会社を続けてくれ。俺たちを捨てて逃げるのか」というものでした。氏の目からは涙が溢れ、彼らのためにも何とかしなくては」と気持ちを切り替えました。

氏の心中から 俺は社長だ という偉そうな気持ちが消えた時、自然に頭は低くなったようです。銀行は融資に応じてくれるようになり、妻の両親も一五〇〇万円を貸してくれるなど、周囲の人たちの力によって再建を果たすに至りました。

私たちが学んでいる純粋倫理に、「気づいたらすぐする」という実践があります。「間違いに気がついたならば、サツと改める」「必要なことには気軽に喜んで取り組む」など、一歩でも前に進もうと懸命に心がける時、新たな活路が見えてくるのです。

世には自分を棚に上げ、他人を誹謗中傷する人も見られます。しかし、その流れに飲まれることなく、自分の課題や為すべき事柄を明確にする姿勢こそが、自分を磨き高める道です。自身の掲げた目標を念頭に、これまでの自分を見つめ、新たな自分づくりに積極果敢に取り組みましょう。